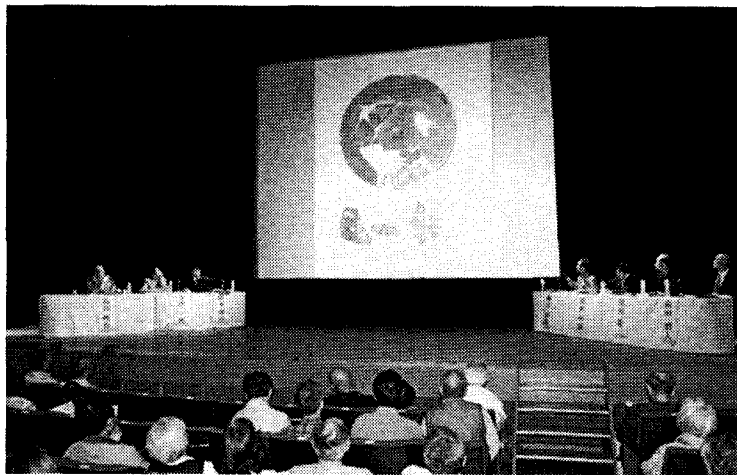


「纏向」形成勢力で議論白熱

桜井で歴史フォーラム

「女王卑弥呼の国を探る」

卑弥呼の居館だった可能性がある大型建物跡が昨年11月に発見された邪馬台国の有力候補地、桜井市の纏向遺跡をテーマにしたフォーラム「女王卑弥呼の国を探る in 桜井」が12日、同市粟殿の桜井市民会館で開かれ、古代史の専門家らが、国内最初の「都市」ともされる「纏向」を形成した勢力について白熱した議論を展開した。



卑弥呼や纏向遺跡について意見を交わすパネリストたち
 桜井市

フォーラムは桜井市の知名度アップと観光客の誘致を目的に、平成19年から市が東京で毎年開催しているが、今年は平城遷都1300年記念事業の一環として地元で初開催。

寺澤薫・県立橿原考古学研究所総務企画部長の基調講演「卑弥呼は纏向にいたか？」などに続き、俳優でアマチュア考古学者の刈谷俊介さんの司会進行によるシンポジウムが行われた。

出土した土器の種類から、全国から人が集まっていたことが分かっている「纏向」について、柳田康雄・国学院大文学部教授は「九州北部にあったとされるイト国が3世紀初頭に纏

向へ移り、卑弥呼を擁して打ち立てた」と主張。一方、福永伸哉・大阪大学院教授は「近畿の勢力が主導し、東海から九州までの勢力を結集させて誕生した」と反論した。

纏向遺跡を生かした桜井市の活性化策についても議論がおよび、柳田教授は吉野ヶ里遺跡（佐賀県）などを例に挙げ、「遠方からでも観光客を集められるよう

な復元建物を建ててみては」、福永教授は「『纏向』や『邪馬台国』の名を冠した散策路を設定してみては」と提案した。

フォーラムを聴講した桜井市浅古の主婦、石田正子さん(65)は「地元に住んでいるが、あまり纏向遺跡のことを勉強したことはなく、卑弥呼や邪馬台国に関心を持つ良いきっかけになりました」と話していた。